
IS < インフィニット・ストラトス > After sinking

杭打王子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS > インフィニット・ストラトス > After sin
king

【Nコード】

N9870X

【作者名】

杭打王子

【あらすじ】

ラインアーク防衛で水没してしまうリンクス四名は、約11メートルのネクストが2メートル以下のサイズになってISの世界に飛ばされてしまった。

彼らは見知らぬ世界でいったいどのような生活をすごすのでしょうか？！

プロローグ（前書き）

はじめまして、初投稿させていただきました。

この発想は某幻想入りのパクリ・・・なのかな？

文がひどい有様だと思いますがどうぞよろしくおねがいします。

プロローグ

ラインアークは今最大の危機が迫っている。

「政治屋ども リベルタリア気取りも今日までだな、貴様らには水底が似合いだ。いけるな？フラジール」
カロードのランク1オツツダルヴァ

「はい。そのつもりです」

アスピナ所属のcube

企業連に雇われた彼らは俺を潰しに来た。そう、ホワイトグリントを・・・

潰されてしまえばラインアークは重要な戦力を失い、反クレイドル活動はおろか、フィオナやラインアークの住民を企業の攻撃から守ることすらできなくなるだろう。

この最高戦力同士の戦いは企業とラインアークの運命を左右することになるだろう。

上の連中はこの襲撃の前、リンクスの試験としてここを襲撃したりリンクス・・・ストレイドを俺の両機として雇ったそうだ。

「ホワイト・グリント オペレーター、フィオナ・イエルネフェルトです。ご協力に感謝します。共に幸運を」

彼女は喋れない俺に代わって通信を担当をしてくれる、前は喋れて

いたのだがリンクス戦争最後・・・プロトタイプネクスト・ARE
THAとの戦闘のさなかコックピットにコジマ粒子が混入、気管支
がただれて喋ることができなくなった。

「こちらストレイド・・・あなたの両機だ・・・邪魔はしないよう
にする」

両機が通信をおくってくる。彼のアセンブルはAALIIYAHをベ
ースに右手にはMOTORCORA、左手にはMOONLIGHT
T、背部兵装はRESORが積んであり、ほとんどリンクス戦争
で潰された企業のパーツで組んであった。

戦闘が始まる・・・

相手のステイシスとフラジールはどちらも空中戦特化型の機体だ。
フラジールはマシンガンオンリーなので先に厄介なステイシスを先
に落とす。

ストレイドも同じ考えのようだ。フラジールを無視して二機で攻撃
を加える。

ステイシスはストレイドに向けて、弾丸と誘導弾でかく乱し回避先
にレーザーバズーカを浴びせかける。

「戦場に迷い込んだのか？素人が…話にもならんな」

「くっ！落ちろお！」

ストレイドは被弾しながらプラズマキャノンをぶっ放している。

俺はステイシスの後ろに回り分裂ミサイルとライフル弾の弾幕で攻撃後ろからの攻撃を食らうとステイシスは180度反転するとこちらに実弾とレーザーを放ってきた。

(ストレイドとも距離がある・・・ここは・・・)

多少の被弾を覚悟で急速接近しアサルトアーマーAAを起動、ステイシスを緑色の光で包み込む。

「クッ、メインブースタが完全に逝ってやがる。ダメだ、沈んでいく…こんなものが私の最期か…」

悔しさと失望の音が聞こえる。さっきの攻撃でブースタを壊しかけAAで止めを刺してステイシスを撃破する。

しかし、

「逝ってしまいましたか・・・しかし彼はチャンスくれた。」

通信が入る、フラジールの四門チェインガンが二丁、こちらを向き、火を噴く。

さっきのAAでプライマルアーマーPAは消えているホワイトグリントは弾丸の雨をもろにくらう。

「ホワイト・グリント、戦闘不能です。…彼はもう、あなたの助けになれません。ごめんなさい」

ストレイドに送られた通信がこちらにも聞こえた。次の瞬間、海に着水・・・そのまま沈んでいく。

(結局、俺は誰も守れなかったのか・・・)

通信用キーボードに手を延ばし、

『すまない、フィオナ・・・』

という短い文を送信する。

そしてカメラは、二つの新たな波紋が海面にできているのを写す。それぞれの中心からネクストが沈んできた。

(相打ちか・・・この戦いの勝者は誰なのだろうか?)

そう思い、装甲が水圧でへこんでいくのを聞きながら目を閉じた。

そしてその数秒後声が聞こえた。

「その正体不明機！武器を捨て、手を上げなさい！」

女性の声だ・・・スピーカーからではなく、肉声だ。

そして“生身”で地面に立っている感覚がする。さっきまでネクス

トに乗っていて海に沈んでいたというのに・・・
目を開けるとパワードスーツを着た女性が数名、武器を構えて5メートルほど離れて囲んでいる。

「もう一度言う、武器を捨て、手を上げなさい！」

確かに何かを握っている感覚がある。確認すると051ANNRと
063ANNARが握られていたことに驚き、自分の腕を見て驚く・・・

自分の愛機ホワイトグリントの腕だったのだから・・・

プロローグ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございます。

いやーまずい、フラジールを強くしすぎたかも・・・まああつちに
行ったらもちろん紙装甲にしますよ。

さて次回はグリントさんが質問をされまくります。

感想待ってます。

Examination (前書き)

というわけで2話目できました。

今回は少し長めです。

では、ごらねー！

Examination

自分に起こったことはあまりにも唐突過ぎた。

目を開けたら360度ホールドアップ状態で

海にいたと思えば陸に立っていて、

生身だと思ったら、2mサイズのネクストだったからだ。

頭の中が混乱している中、パワードスーツを装備した女性が銃を構えてさらに近づいて来た。

俺は反射的に銃口を上げた、

するとパワードスーツ部隊全員がトリガーに指を掛けた。

「変な気は起こさない方がいいわよ。おとなしく銃を渡して」

とリーダーらしきブラウンのショートヘアーの女性が俺に話しかける。

確かにP Aを展開しておらずA Aが放てない今、複数を相手にするのは馬鹿だ。

（拘束するなら今すぐ殺されることは無いな・・・ここは従った方がいいだろう・・・）

銃口を下げ、逆にストックを上げ、銃を取るように促す。

銃の近くにいた女性がそれぞれ受け取る。

「そのミサイルもね」

リーダーが肩を指差しながら言う。

(背部武器もちゃんと付いていたのか。)

バチッ！バチッ！いきなりパージすると、

「「わっ！とっ」と」

さっき銃を受け取った女性が驚きながら、そしてハモリながらキャツチする。

「もう武器は無いわね？デイルン、ナタリー、後ろから付いてきて、武器は押収品倉庫に入れておいてね」

リーダーが指示をすると即座に二人が俺の後ろに回る。そして俺の装備は倉庫に持ってかれてしまった。

「じゃあ、付いてきて」

そういうと背を向けパワードスーツが浮き、床がせり出している所へ向かって飛んでいく。

(！？？ジェット噴射してないぞ。どうやって浮いてるんだ？)

「.....早く行け」

銃でつつかれた。こんな経験はレイブン、リンクスになってから初めてだ。

マジかよ・・・ほんとにネクストになっちまったのか、俺は・・・

自分に何が起こっているかを考えながら連行されていた。今はエレベーターの中で、鏡に映った自分であろう物体を見ながら再確認する。もう一つ確認する点として、

ネクストの搭乗時に視界に映るAPの残量、アーマーポイントENゲージ、ECM濃度、リーダー、高度計が表示されている点^{アーマーポイント}があげられる。

武器情報、PAGEージ、ロックカーソルと狙撃点は武器を装備して
いなく、PAを展開していませんため表示されません。

だがAMS特有の精神障害がない、これはいつたいたいということなのか・・・

高度計がどんどん下がっていくのを伝えてくる・・・-10・・・
-15・・・-20でとまる。

ドアが開くとリーダーが歩き出す、付いていくとなんとも重圧な扉の前にでる。

「さあ、中に入って、後で予想外事態対策官が来るから待ってて。」

中に入ると扉は閉まる。部屋には金属のテーブルと椅子が2脚が置いてある。イメージ的には映画ア・ロボットの取調べ室だ。

(俺はサニー的なポジションなのか、同じ白色だし・・・何とか対策官が来ると言っていたな・・・きつとスプーナー刑事だろう。まあ、とりあえず座るか)

背もたれが無い椅子に座る。もう一方の椅子には背もたれが付いていた。背中にもいろいろ付いているからの配慮だろうか？

(・・・てか、ここどこ？建物的ではなくて、緯度・経度的な意味で。)

さっきまでずっと自分がネクスト化したことを考えていたから場所などはあまり考えていなかった。

(ラインアークから陸地まで何キロだったっけ？3000キロはあるよなあ、それを目を瞑っていた数秒で移動すんのはむりだよな。常識的に考えて・・・)

V・O・B使ったって一時間以上かかるし、まず燃料がもたない。

(目をつむった時点で死んで天国にいったのか？いや、それは無いな。)

「目を開けたら、銃口が・・・!？」

なんていう天国は地獄だ。そして地獄はこんな近代的ではないはずだ。

いろいろなパターンを考えるとむしろ頭がぐちゃぐちゃになっていく・・・

ブシューと自動ドアが開く・・・お？スプーナー刑事？ウインクを見せてく・・・れ？

「貴様が、アリーナに突然出現した正体不明機とは・・・」

現れたのは黒のスーツを着る女性だった。雰囲気は霞スミカに似ている。彼女のつけていた小物はいつもピンクだったが目の前の女性はアクセサリー類をつけていない。

「ふむ・・・ISでは無いな、ならば無人機か・・・」

（ISって何だ？つかそれより！！）

「俺は人間だ！」

人間という存在を否定されたためそう言い返す。

（まあこのナリじゃ無理があるか・・・てか喋れたのか俺・・・確かネクストには拠点制圧のとき降伏させるために使うスピ・カーが付いてたな。）

「どこにそんな四股の付け根が細い奴がいる？それとも脳みそが入っているのか？」

「肉体は無いが心はある」

胡散臭そうにこちらを見てくる。

「そうか・・・では名前と年齢、性別を聞こう」

「機体名ホワイトグリント、パイロット名unknown、
ピー》歳、男、だ」

「フツ・・・名前も正体不明か。まあいい、私は織斑千冬だ。機体名とはその体のことか？」

「ああそうだ。デザインはネクストのまんまだがサイズが六分の一になってる」

「ん？ネクストとはなんだ？新しい兵器か？」

「ええ！？アーマードコア・ネクストを知らないのか！？」

「アの字すら聞いたこと無いな。」

(地上に住んでいながらアーマードコアを知らないだと！？ドンだけ平和なんだ！でもライフルを持ったパワードスーツがいたよな・・・)

「・・・・・・・・・・」

「・・・その話は後にしよう。ホワイトグリント、お前の目的は何だ？そしてどうやってアリーナの中に入った？」

「目的なんてのは無い。戦闘中にやられ、海中で目をつむったら声が聞こえ、目を開けたらドーム場の建物の中に立ってたんだ」

「^{トフラック}薬物乱用は？」

「やってねーよ！鎮静剤は結構使うが・・・」

原因はもちろんAMS精神障害、アスピナが作ってるやつは良く効く

「そうか・・・ではどこから来たんだ？」

「自由海上都市ラインアークの近海だな」

聞いたことが無いなという顔をする。

「すまん、国名から頼む」

「国？そんなのは十数年前に解体されたはずだが」

そう国家解体戦争・・・俺も死に掛けたからあまり思い出したくないな・・・

「おまえは何を言っているんだ。国連加盟国は現在192カ国もあるぞ」

「エエエエエエエ！！！」

国が200個もあつたときなんて50年ぐらい前だ。そりゃ驚くさ・・・

あちらはこっちの反応と質問の返し方にもしやと思つたのか

「まさかお前、別の世界から来たとか言うのか？」

「お、恐らく……」

この世界で聞くこと全てが自分の世界と違っているのだからそうなのだろう。

「ということは、ここがどこだか知らないのか？」

コクツコクツとうなずく

「ここはIS学園……」

と目の前の対策官、織斑千冬はこの世界のことを説明する。IS学園・IS・日本・世界情勢・アラスカ条約etc……

(なるほどこの世界の最強の兵器はISでありそのため^{インフィニット・ストラトス}の条約まであり、そしてここはIS関係のことを教え込むために作られた日本の施設で、織斑千冬はここの教職員だそうだ)

「さてと、現時点で話せることは全て話した。次はお前の番だ……」

「わかった……まずはAC^{ノーマル}から……」

自分がいた世界のことを千冬と同じように説明する。ノーマル・ネクスト・リンクス・コジマ粒子・企業・国家解体戦争・リンクス戦争・経済戦争・クレイドル体制・コジマ汚染etc……

「ふむ……つまりお前はそっちの世界の最強の兵器AC・ネクストに乗るリンクスで、撃破され水没したらその姿になってここに来たというわけだな？」

「ああ……」

(思い出したら心が折れそうだった……)

「まさかコジマ粒子がそんなに危険なものだったとはな……」

「ん？ここにもコジマ粒子があるのか？」

聞く限りでは問題になってなかったが聞かずにはいられなかった。

「ああ、あるぞ。そつちみたいに汚染を引き起こすわけじゃないが」

「それはコジマ粒子なのか？」

「話すより見せた方がいいな、待ってる、今もって来る」

といい席を立つ

「え？あつ！ちよまつ！」

第一級の危険物を持ってくるといっているのだ。止めようとして当然。変態技術者どもなら止めることはしないだろう。

ブシューと自動ドアが開き千冬が部屋から出る。

(MA ZI KAYO !もってこれんのあ！？百聞は一見にしかずっていうけども！それより侵入者から目を離してもいいのによ……逃げる気は無いけど)

十数分後、千冬が戻ってきた。右手に禍々しい光を放つ粒子入りのコルク栓の子瓶をもちながら・・・

「び、びび、瓶詰めって・・・」

こつちじゃそんなことすればコジマが漏れて皮膚が焼け爛れだしますよ。

「そんなにビクビクするな・・・どうだ、そつちのやつと同じものか？」

(見た目は同じだな・・・PA整波装置を使えば分かるか?)

そう考え腕部のそれを迫り出し、瓶に近づける。

「さっき言っていたPA整波装置か、なるほど」

作動させるとコフオオオオという音とともに瓶の中の粒子が舞い始める。

「どうだ・・・?」

「本物です・・・」

整波装置をしまつと何故か安心した気持ちになった。自分がこの世界で生活しても大丈夫ということが分かったからかもしれない。

「・・・この世界でコジマ粒子はどんな扱いなんだ？」

先ほどは聞けなかったがこの安心感のおかげで聞いた。

「緑色に光るキレイなただの砂として知られている。人体には無害、そのためこのように瓶詰めすればキーホルダーになる。ただ摂取しても大丈夫だがかなりマズイらしい」

瓶を振りながらさういう。

（キーホルダーだと？あ、ありえねえトーラスでもそんなことしねーぞ。しかも摂取って・・・誰か食べたのかよ・・・）

「それ・・・誰が持っていたんだ？」

「この教員の山田真耶先生が持っていて、前に500円で買ったそうだ」

「すげーなあ・・・そいつ・・・」

「こんなところか。これで取調べを終わる。・・・それと最後に聞くがここで働く気はないか？」

「へ？」

「つまり雇いたいと言っている。お前がそのまま外に出れば、騒ぎになり、捕獲され、ねじの一本まで分解されるぞ」

ゾツとする。さういうのはAMS接続プラグ手術で十分堪能した。

「お願いします」

「分かった。私はこれからお前のことを会議に掛けてどうするかを決める。最終決定は上だが、期待していてくれ」

そう言うと千冬は席を立つと自動ドアが開き、外に出る。
数秒後またドアが開いた、

「暇なのだろう？ならこれを読むといい」

渡されたのはなんとも分厚い本だ。表紙には……

「ISS学園へ、ようこそ！」

Examination (後書き)

歓迎しよう、盛大になー!!

今回も最後まで見ていただきありがとうございます。

コジマ粒子は無毒にしておかないといけません。有毒 PA 張れな
い IS に勝ち目なし マツハで蜂の巣 ジェネレーターがイカレ
ただと? コジマ汚染でさあ大変! になるからです。

少し長すぎましたかね? ご指摘願います。

それとできれば感想もお願いします。

今回は、リンクス? 試験です。

B a t t l e e x a m i n a t i o n (前書き)

遅れましたが第3話です。

今回は長い・・・かな？それに比例して文法が・・・

ちなみに原作の時間軸は5月です。

では、どうぞ！

Battle examination

「おめでとう、今日から君はレイヴンだ」

懐かしい・・・かなり前のことだ。

「あなたにアナトリアの傭兵として戦ってもらいたい」

これは国家解体戦争の後、コロニー・アナトリアの中だ。

「ホワイトグリント、戦闘不能です。・・・」

これは・・・

「おい、起きろ！ホワイトグリント！」

ゴン！ゴン！とコアを叩かれる。脳みそに来る響きだ。無いけどな・
・

「ん？」

どうやらあの分厚い本を読んでいるうちに寝てしまったようだ。

この体は眠ると頭がコアに埋まっている状態（OPのアレ）になるらしい。

そして頭を外に出すと

「起きたか、さっきの格好はずいぶんと眠りやすそうだったな」

目の前には織斑千冬がいた。

「お、千冬さん。会議はどうだった？」

寝起きでそう聞く。

「別にかまわないそうだ。というわけで学園警備員として雇う。」

（警備員ねえ・・・ネクストは防衛にむかないけど、まあいいか。
今までラインアークを守ってこれたし）

企業連は度々ラインアークにいやがらせ・・・もとい襲撃行っていくのでそれから守るためにホワイトグリントで防衛していた。

「・・・あとISとの戦闘試験を受けさせるらしい。」

「ISと戦うのか？チュートリアルで？」

（訓練機体でネクスト戦のようなもんだよな・・・）

「上の連中はお前を高く評価しているんじゃないか？戦闘経験はお前の方が多い。まあ最強対最強が見たいだけかもしれないが・・・」

不敵な笑みを見せる・・・まさか千冬が受けさせようとしたのか？
まあ、ISとネクストは場所が違えど、どちらも通常兵器じゃ太刀打ちできないほどの火力と防御力を持っている。

じゃあそれらをぶつけ合ったらどうなるんだ？とか思いついたんだろ。つまり某番組^{ほしたて}だ。

「俺の装備は？」

「第0アリーナに運んでおいた。そこで試験を受けてもらう。あと、お前と戦うISは“ラファール・リヴァイブ”だ。」

どうやら第二世代型のISと戦うようだ。その機体は機動力優先型で癖が無く操作しやすいのと、対応している装備が豊富なマルチロール機だ。それなのにパイルバンカーが標準装備という玄人仕様でもある。

「わかった。試験はいつからだ？」

「一時間後だ。試験前に体を動かしたいか？」

「ああ、FCS、出力関係がどうなっているか調べたい」

機体のブースター出力知らなくてQB吹かしたら壁にズドン！とかみっともなさ過ぎる。

「ならば、行こうか」

少し移動してピットに入る

「さて・・・俺の装備はこれだな・・・」

ライフル2丁は握れるがミサイルが付けられない・・・
(背中幅が大きすぎる・・・修正はいらさないが)

「スマンがミサイルつけてもらえないか？手が届かない」

「ん、わかった。ここのジョイントだな？」

「ああ、差し込んでくれればロックできる」

千冬は軽々とそれを持ち上げ、一つずつ付けた。女性一人で持てる重さじゃないとおもつが・・・

「準備運動は、30分間やっていいぞ。私は管制室にいる」

「了解」

千冬がピットを出たのを確認し、

『システム、戦闘モード、起動します。』

OSの音声を聞き、ピットからアリ・ナに出た。

「そろそろ時間だ。ピットにもどれ」

アリーナに付けられたスピーカーから声がする。

俺は30分間みっちりと六分の一サイズの機体を動かした。AMS障害が無く、不快感もないみたいだ。

この世界では、ブースタの水平推力、垂直推力とクイック推力が前の世界に比べて出力が上がっており、消費が少なくなっている（飛び続けるのは無理）

PA整波装置は問題なく動作しPAがキチンと整波され、FCSも異状が無いことが分かっている。

APの値は6分の一では無く、前の世界と同じだ。

分からないのは自分の装甲のレベルと、PAの厚さ、武器の威力、AAの威力ぐらいだ。

『システム、通常モードに移行します。』

PAを解除した後、ピットに入り、置いてある長いすに腰掛ける。数十秒後、千冬が来た。

「なかなかの瞬発力じゃないか。そしてさっきの緑色の膜がコジマ粒子を使ったPAか？」

千冬表情はコジマに興味がわいてきた。という感じだ。

この世界のコジマ粒子は生物に対する有害性がまったく無い。そのためPAやAAを使用しても大丈夫だそうだ。

「ああそうだ。実弾がそれに当たると、速度が落ち、さらに分子が分解され、威力が落ちる。レーザーの場合はコジマに当たって威力

が減衰する。」

「万能だな」

「しかし、攻撃を受けると安定還流が乱れてしまい、防御効果が低下する。」

「攻撃を受け続けたらどうなる？」

「最悪PAが無くなり、素っ裸になる。時間がたてば回復するぞ」

ほおと言う千冬・・・コジマには人を引き付ける何かがあるのか？
トラスしかり、アクアビットしかり・・・

「それはそうとあと何分で試験開始だ？」

「5分だ。私は試験準備をしておく」

機械だから肉体的な疲労は無いだろう？といいピットをでた。いや
みを言いやがったぞ。

「はぁ・・・コジマが無害・・・か」

もしそうだったら前の世界はどうなっていたのだろうか・・・ふと
考えていると水の球体が目の前を通過する。

「うおっ！？何だこれ?!」

無重力以外じゃできない現象に驚く、するとその球体がヘッドパ
ーツに突っ込んでくる。

「おおおおお！！？！？」

だが頭部スタビライザーに突き刺さって止まった。

「驚いた？」

いたずらが成功して喜んでいるような声が聞こえる。球体を付けたままカメラをそちらに向けると蒼髪の少女が扇子を持ちながら立っていた。

「……君はこの生徒か？授業中じゃないのか？」

つか立ち入り禁止じゃねえの？

「さっき終わったの、それよりあなたが朝っぱらからきた侵入者？」

と蒼髪の少女が質問してくる。別に答えてもいいかと思

「そうみたいだな……」

と答える。

「ふん……ていうかあなた人？」

またそれか……勘弁してくれ。

「肉体は無いが心はある。名前もある、ホワイトグリントだ」

「あら、ごめんなさい。私は更識楯無、IS学園の生徒会会長よ」

目の前の少女……楯無は誇らしげに言う。そんなにすごいのか會長で

「この学園じゃ最強って意味なのよ？」

うお、なんか読まれた……

「そうなのか……それよりこの水球は何なんだ？」

「ふふっ、秘密　それじゃあね、白き閃光さん」

ダッシュでピットから出る楯無

「え！？ちょ、ま！！……はぁ……」

なんなんだあの子……

するとドアから開いた扇子を持った腕が出てくる。扇子には激流と書いてある。

はて、何のことやら……
扇子がパチンと閉じられた瞬間、水球の形が崩れる。

「うおおお？！なんじゃこりゃー！」

胸部装甲に水がかかり、ピットの中で騒ぐ、もう一度ドアを見ても腕は引っ込んでいる。

「試験開始時間だ。アリーナに出ろ」

千冬の声がスピーカーから聞こえる。

「ぬおお、ちくしょうこのまま行くしかねえじゃねえか」

『システム、戦闘モード、起動します。』
再びOS音声を聞き、PAを張りながらブースターを吹かしアリーナに出る。

アリーナの中央には、千冬の言った通り、リヴァイブが浮かんでいた。

自分もアリーナの中央に浮かぶと相手の顔が見えた。緑髪・碧眼で眼鏡を掛けている。俺をみるとこの姿に少し戸惑っているようだ。

「これより対IS戦闘試験を開始する。試験官は山田真耶先生だ」

（この人がゴジマ瓶を持っていた人か・・・機体も緑色だし、緑色がすきなのかな？）

「さて、この試験は、山田先生のシールドエネルギーを削りきるかホワイトグレントが圧倒的に不利になるまで行っ」

つまりこの試験に二度目はないが、生かしてもらえる。ということだ。

「よ、よろしくお願いします。」

「こちらこそよろしく・・・」

相手が挨拶をしてきたのでこちらも返す。

「あの、何で濡れてるんですか？」

「生徒のイタズラに会いました」

ああ、あの子ですね。と答える山田先生、会長のイタズラ好きは有名ならしい

「では、ブザーが鳴ったら戦闘開始だ」

さっきまで喋っていたがその声が聞こえると両者臨戦態勢を整えた。緊迫する瞬間だ。アリーナ、オーダーマッチでも体感している。

そしてブザーがなる。

それと同時に後退し、FCSがロックしたところめがけて2丁のライフルを連射する。今のところ腕の運動性能を超える速さで動いていないので弾丸はよく当たる。青いハニカムに弾かれているがそれでダメージは与えられているらしい。

相手もライフルを撃ってきた。弾速もなかなか、がPAに威力を持つていかれ、俺に当たるころには、装甲をへこませることすらできなくなっていた。対PA用の弾を使わないと、大体こんな感じになる

「あわわ、まったく効いてない・・・」

焦りの声を上げる。その間にも俺はスライド移動しながらライフルを撃ち続けシールドを削っていく。

すると山田先生は武器をマシンガン2丁に持ち替え、接近し雨を降らせてくる。

そんなの喰らったらPAが持たないので、距離をとりつつ右へ左へとQBを吹かしまくった。

十数発命中したが、臆することなくライフルを連射する。

「通常弾がダメなら榴弾で・・・！」

こんどはグレネードランチャーが出てきた。日本のグレネードは・
・マズイ・・・

ボン！ボン！ボン！と三連射。む、無理だ、避けられねえ

ドガアアアン！！

「やったか?!」

もくもくと煙が上がる。だがフラグ

「まだまだあいけるぜえ！」

と言い分裂ミサイル発射する。グレネードによる機体の損害はあまりなかった。どうやら防御力は前の世界と同じのようだ。

「ミサイルなら打ち落とす!!」

グレランをライフルに持ち替え引き金を絞ったがミサイルは弾を避けるように分裂した。

「えええええ?!?!そんなの聞いてな・・・」

ポポポポーン!!

煙が空中でもくもくとたっていた。するとその中からリヴァイブが
パイルバンカーを装備して急接近して来る。

メンツはいつもの3人組だ。

「ふいゝ今日は大変そうだな」

「何がだ？」

「先生達、ほら朝のアレだ。侵入者がなんたらって、あつただろ？」

今日は朝っぱらから大騒ぎだった。鳴り響く緊急放送で騒ぐ生徒達。まあ、うちのクラスには千冬姉がいたからすぐ収まった。それでも騒ぐ連中は伝家の宝刀、出席簿で机に沈む。

その後、千冬姉は放送で職員室に呼ばれていったので今日の授業は山田先生オンリーだった。

そして山田先生の放課後の補修を受けようとしたら

「ごめんなさい、織斑君、今日は侵入者の件があるので無理です」と言っつて、どツかに走って行ってしまった。

「ええ、なんだつたんでしょね。ただの人間ならあそこまではする必要は無いですよね」

口を開いたのはセシリアだった。ただの人間ならと言ったのは、普通の高校では普通に脅威だがIS学園では人間はおるか戦車で来ても脅威にならない、持って5秒、最速1秒の世界だと思っ

「もしかして宇宙人とか？」

「まさか・・・それより一夏、来週からクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナの試合用調整があるから、特訓は今日までだな」

話題を変える筈、あと5分はあの話でいけるのにな・・・

「そういえばそうだったな」

「IS操縦もようやく様になってきたな。今度こそ・・・」

「まあ、私が教えてあげているんですもの。できて当然ですわ」

「ふん。中距離射撃型の戦闘法など役に立たない」

「それだったら篠ノ之さんのISを使用しない訓練なんて無意味ですわ」

「まあ始まったよ。言い争い、日英同盟が懐かしまれる。しらんけどそしてアリ・ナに付いた俺らは、ピットに入る。」

「おそかったじゃない、一夏!」

「ピットにいたのは鈴だった。一瞬片腕が無いように見えたがちゃんと付いていた。」

「何だよ、鈴」

「話がしたいからここにきたのだろつ。ならば聞くしかない。」

「早速で悪いけど謝りなさい!」

「はあ?何で謝んなきゃいけないんだ」

「乙女の約束を踏みにじったからよ」

「約束は覚えてただろうが!！」

「意味が違うのよ、意味が!はあ、あつたまきた。どうあつても謝らないっていう訳ね!？」

「説明してくれりゃ謝るっつの!！」

「せ、説明したくないからこうして来てるんでしようが!！」

何が言いたいか分からない。今の鈴は人の言葉も解さんだろう。

「じゃあこうしましょう!来週のクラス対抗戦で勝った方が負けた方に一つ言うことを聞かせられるってことでいいわね?」

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらうからな!」

「アンタもあたしに謝る練習しておきなさいよ!！」

「何でだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは!この朴念仁!鎧土竜!粗製!アホ!馬鹿はアンタよ!！」

鎧土竜ってGじゃねえか。それは俺でもムカつく

「うるさい、貧乳」

あ、やべえ、危な――

ズドガアアアアアン!!!!!!

「な、なんだ!？」

よろめくほどの爆発がした。鈴を見ると動揺しているようだが腕がIS化していた。そしてそれを振り上げたままもてあましている。

「鈴……今のお前か？」

「違うわよ!それよりアンタ、言うてはならないことを、言ったわね!」

これは、マズイ、マジギレだ。

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

「今の『は』!?!今の『も』よ!いつだって……」

《異常な爆発を検知しました。生徒は職員 of 誘導に従って避難してください》

放送が入り鈴の言葉が遮られた。

「皆さん、大丈夫?こっちよ」

先生がピット入ってきて避難をうながす。

「チツ……」

舌打ちをする鈴、そして強く俺を睨んだ。
俺らは、避難中、一回も喋らなかつた。

(鈴の一番気にしてることを言うなんて・・・謝らないといけ
ない・・・)

地下20メートル

W・G・主観

「・・・で、弁解はそれだけか？」

「本当にすみません・・・」

俺は今絶賛説教中(される側)、山田先生には勝つたんだが。

「ああ・・・こんなにしゃがって・・・」

アリーナの方を見て頭を抑えながら千冬が言う、
これはかなり・・・いや、すごくひどい。
特殊合金の床にはクレーターができ、その周りの床はめくれ上がり、
照明器具は全破壊と言うありさま。

原因はもちろんトールラス提供のアサルトアーマー

「はぁ・・・山田先生が死ななくてよかった・・・」

申し訳なきマックスのため息をつく

AAをもろに食らった山田先生はマッハで保健室行き

ついでに言っとくとリヴァイブは大破、ダメージランクはDを超えてこっちもマッハで整備室行き

「まあ、これで上の連中もお前の強さがわかっただろう。試験は合格、てところか」

「ありがとうございます」

「明日はいろいろと準備してもらおう。警備は明後日からだ」

こうしてホワイトグリントの学園生活（警備員）が始まったのだ。

Battle examination (後書き)

最後まで見ていただきありがとうございます。

ああ、うまく起承転結にまとめられてない気がする。

異様に長くなりましたが意見、感想お願いします。

次回はザ・警備員です。

追記：修正しました。盾無 楯無

『AC、モード、起動します』 『システム、モード、起動します』

Reconstruction (前書き)

ハッハー！一ヶ月近くかかったが、まだまだいけるぜメルツエエエ
ル！！

というわけで4話です。遅れてすみませんでした。
オリジナル設定大噴出でお送りします。

Reconstruction

AAでアリーナもろとも山田先生を吹き飛ばした日の翌日。

あの後、俺はアリーナの修理に動員されほぼ徹夜で作業していた。用務員の轡木十蔵さんは最初こそビビッてはいたものの話しているうちにフレンドリーになった。

歳は70近いってのに徹夜できる体力。凄まじいな……作業内容はめくれ上がった装甲板の切断。特殊合金ってこともあって切断は至難の技。レーザーブレードを積んどけば良かった。

そして作業中、千冬が登場、付いて来いといわれ地下整備室へGOしたところだ。

地下20メートル 地下整備室

W・G・主観

「で、何なんです?」

「お前は機械だ。メンテナンス係りを付けた方がいいだろ?」

「え?ああ、俺は今ネクストになってたな……」

何故か知らんが俺は今、完全無欠の自律ロボットになっているのだ

「よし、じゃあ入ってきてくれ」

自動ドアが開きそこからブラウンヘアの女性が入ってきた。

「また会ったわね」

入ってきたのは昨日、俺を連行した隊長。ISでは無くいまはVネツクカットソーにスラックスという服装だ

「彼女がお前のメンテ係りだ」

「よろしく、ローズ・クラークよ」

「ホワイトグリントだ。よろしくローズさん」

手を差し伸べてきたので手を取り握手する。指も細くスタイルもいい、なかなかの美人だ。

「ローズ先生はIS学園の教員で、整備課で彼女に任せたISは稼働効率が三割ましになる。所謂システムエンジニアだ」

三割り増しってドンだけだよ。FRSメモリでフルチューンしたってそこまで行かないぞ。

「戦闘も強いぞ。ISではあらゆる武器を使って効率的に敵を撃破するし、生身での格闘戦では四股が？げるぐらいのリアットをかましてくる。付いたあだ名は『最強のエンジニア』だ」

じよ、冗談じゃ・・・

「最強は褒めすぎよね？織斑先生・・・それで、彼にPICとかステルス迷彩をつければいいのね？」

は？PICとかを俺に付ける？聞いてないぞ

「ああ、このままだと不便だからな」

ローズ先生に答える千冬。
あれ？話がどんどん進んでいる。付けられる側の俺は何のことかわからねえのに

「ストップ！話についていけない」

俺の言葉に千冬はそういえばっていう顔をする

「話してなかったな。IS学園の警備をするにあたってお前の移動手段が問題になった」

「い、移動手段？」

問題ない気がするんだが・・・肩幅は別として

「まず、歩行は揺れがひどくて生徒が勉強に集中できない。ブースターは排気熱と音が問題だ。窓から

ムわつとした空気が入ってくるのは不快だろ？」

たしかに勉強中、そんなことがあったら全力で抗議するな。

「そこでPICだ。音も無いし排気も出ない、おまけに小エネだ」

俺に付けられるであろうPICというものは、ISの基本システムで、これでISは浮遊・加減速などを行うことができる代物だそう
だ。

「なるほど。じゃあステルスをつける理由は？」

「・・・お前が市民の目に留まると厄介なんだ」

厄介をフォルテシモで言われた。まあ、仕方が無いのだが

「わかった。その改造、受けよう」

「あら、すんなり了承したわね。改造に抵抗がありそうだと織斑先生が言っていたのに」

「どうせお尋ね者なんだ。抵抗しても仕方が無い」

別に悪い話じゃないしな・・・IS学園とのつながりを深くする好機ですってか。

「交渉成立だな。私は教務にもどる」

お疲れ様とローズがいい千冬は出て行く

「さて、早速つけましょうか。そこに座って・・・ええと・・・これね」

俺は指差された台に座ると彼女はオプションパーツみたいな物があった金属のトレーをもってくる

「それをつけるのか？それぐらいならここに入りそうだ。固定は武器用のレールを使えばいいな」

といいコアの格納庫をひろげる。彼女がトレーを置き、そこをのぞくと

「取り付けにぴったりね」

といい顔を上げる。髪の毛を耳に掛ける動作は、いい・・・ものだな・・・。

わかるだろう？わからねえか？わかってるんだろ？

「取り付け場所はOKと・・・。エネルギーENはどこから取る？」

「あ？ああ、格納庫の開閉用につながっているやつを使うといいな、一番が装甲が薄いのは付け根だ」

「ここね」

指で内側を触られる。感触はないが変な気持ちだ。

「EN供給をきつた方がいいか？」

「そうね。感電が怖いし」

そう聞くと俺は格納庫の隔壁閉鎖をする。この機能は破損した部分からの漏電を防ぐのに使われるもので、本来はオペレーターが操作するものだがパイロットでも操作できる。

「EN供給をカットした」

「ありがと。でもこれって血液を止めてると同じね」

う・・・そんなことしてるのか俺は・・・まあ生身だったら腐りだすけど・・・

「・・・それじゃいくわよ」

バイザーが漢字の「非」に似ている溶接マスクをつけ、メス型プラズマカッターを俺の体にあてた

激しく火花を散らしながら、内側の装甲を切り取る。

「はい、取れた。この奥に見えるのがエネルギーパイプね。これは円形に・・・」

くるりと円を描くとピンセットを取り出しカットされたパイプを引き抜く

「ふう・・・ENを流してくれない？電圧とか調べたいから」
「分かった」

言われたとおりにENを流す。すると彼女はテスターを取り出すとENパイプに押し付けた。

「電圧、電流も許容範囲内ね。これでENはOKと・・・操作はどうする？千冬先生の話聞いてるとIRSとかFRSとかにつないでしまうのがいいと思うけど」

（千冬の話・・・ということは昨日の取調べで得たことをすでに伝達しているのか。）

彼女が言ったIRSと言うのはAMSから送られてくる動きのイメージを解釈し命令を伝達するシステムだ。この役割は人間で言う小脳や脳幹とほぼ同じで、これが壊れるとネクストは動かなくなってしまう。

それが理由なのか脆いで有名なアスピナのSOBREIROも頭部だけをはかるうじて防御性能を上げていたみたいだ。

あと、FRSと言うのは各パーツに流された命令を受け取り実行するシステムだ。人間で言うならば運動神経に当たる部分だ。これも吹き飛ばすと動かなくなる。

「伝達系につなぐのか・・・」

「ええ、ISが操作するときも脳内のイメージを読み取って最適化された命令で動作しているから、操作しやすいと思うわ」

「システム干渉しないのか？」

警戒して当然。システム障害が発生し、イメージが逆流して脳を焼き切られる事故もあったからだ。

「そこなのよね……。あ、そうだ。立体でイメージすれば干渉しないんじゃないかしら」

「立体か……。確かにそれを使う命令はないな。でも、使うことが無いということはそのイメージが解釈されないことなんだが……。……IRSをいじるか？」

「そんなことできるの？」

「ああ、前の前に住んでたところがIRS/FRSの研究所アナトリアだったからな。メインシステムに干渉しない独立したものを追加するぐらいならできる」

まあ、暇そうだったフィオナの話聞いていたらいじれるようになってたんだけども。

「よかった。はい、使う立体をコードにしといたから、これを使って」

携帯用ディスプレイを渡され、受け取った。この短時間でどうやって準備したんだ？

「ありがとう。さて、少し頭の中をいじるか」

「じゃあ、私はその間に伝達系につなぐ穴をあけてPICとステルス在中に付けてるわ」

「伝達系の場所は左右の格納庫を隔てている壁の中だ」

神経が通っている部分を教える。変なところを切られては困る。

「了解」

といい彼女はプラズマカッターを握り直し格納庫に手を入れる。

こちらも始めるか

『システム、調整モードに移行します。』

このモードはFRSメモリなどを設定するためのものだ。

戦場ではまったく聞くことが無いOSの音声を聞くと、ウィンドウが眼前に広がった。元の世界では、コクピットのディスプレイにウィンドウが出るのだが、肉体がネクストだところなるらしい。視線を動かすとカーソルも動く、それを動かしIRS設定のウィンドウを探す

(と、何だこれ？記憶データ？前は無かったよな・・・)

興味本位で開いてみると膨大な数のサムネイルが現れた。端にはキーワード検索、日付検索などの検索ツールがある。

(これ全部、俺の記憶か？じゃあ試しに・・・)

『ソルディオス』と脳内で入力してみる。するとサムネイルに禍々しい球体が映った。

(うわあ、記憶だコレ。・・・てことはエロイものを一回見れば反芻できるのか！？しかもデータのコピー転送が可能・・・ぬっふっふ)

検索にカーソルを合わせ入力する。が、『フィオナ おx t』と入力した所で声がかかる。

「どう？設定できそう？」

「え！？ああ、そうだな・・・」

「それはよかった」

もしコレが普通のパソコンだったら、恥ずかしくて死んでいるだろう。

・・・オカンにエロファイル見られた学生みたいだな、俺。

俺は記憶データファイルを閉じ、IRS設定のウィンドウを開くと、そこから追加設定を開き、渡されたコードを入力しはじめた。

「ちょっと聞きたいことがあるんだが・・・」

コード入力も大体終了したころ唐突にきいた。

「ん、何？」

PICを固定し終わり、ステルスを固定するナットを閉めながら聞き返してくる

「俺の弾薬とかどうなってるんだ？」

この世界じゃB・F・Fなんていう企業はおそらく無いだろう。MSACインターナショナルもないから実弾のみの俺は弾薬の供給が無いことは死活問題である。

つくづくEN武器を装備していなかったことが悔やまれる。

「ああ、それね・・・ライフル弾は別に問題なく頼めるんだけど。ミサイルがね・・・同じものを注文となるとむりね」

「まあ2.8メートルのものを縮小したものだから技術的にも無理があるのか？」

「もともと分裂ミサイルと言うカテゴリがないのよ。企業に発射機ごと提供してみれば換わりになるものを作ってくれるかもしれないわね」

「そうか・・・うーむ、しばらくは使用を控えるか・・・」

節約か。ラインアークが極貧の時はつらかったなあ

「よし、固定完了。次は電極を伝達系にくっ付けるわよ」

ぶすっ

「おおおおああ痛つてええええええ！！？」

いろんな物を超越した痛み。人間は神経に触ると痛いつて聞いたけどネクストでもかよ・・・
つまり伝達系⇨神経てことか？

「あらごめんなさい。まさかこんな反応をするなんて思わなかったのよ。でもあともう一本・・・」

「マジかよ、夢なら覚め・・・！」

「ふふっ、嘘よ」

怖い人だ・・・

「で、入力終わった？」

「ああ」

「じゃあ立ち上がった？」

『システム、通常モードに移行します』

と言う音声聞き格納庫を閉じながら立ち上がる。

「気分はわるくない？」

「痛みだけだ」

「じゃあ早速PICで動いてみましょう。円錐のイメージを頭上に作って……」

お、スルーしやがったな。

まあいい……イメージを浮かべるか

PICを起動し言われたとおりにイメージする。

「お、お、お？浮いてるのか？」

イメージしたら高度計がじんわりとあがっている。なんていうか今まで感じたことの無い感覚だ

「ええ、浮いているわよ。そこから前に円錐をイメージして……
またイメージすると前に進んだ。」

「次は右、左、後ろと水平移動してみ……
言われたとおりの動きをする。」

「OK。次は球体を回すようなイメージ……
すると自分は右に旋回した。」

「逆回りでイメージ……
こんどは左に旋回している。」

「よし。問題なしね。下に降りてきて
PICを切り地面にズンと降りた。」

「あ、ステルスはどうする？ソースコードに入れなかったけど……

」

「ステルスは大丈夫だ。もともとイメージできるようになっていたからな」

といいステルスを起動してみせる。

「おお、まったく見えない。これなら上に出てもいいわね」

「上？と言うことは地上に出るのか？」

「ええ、警備員として働くんでしょう？ここを案内するわ。付いてきて」

整備室から出たあと、俺がこの地下に入ってきたエレベーターで地上にでた。

そして俺はステルスとPICを起動しローズの真上を飛んでいる。

IS学園はいま一時間目の休み時間らしい。教室にも廊下にも女の子があふれていた。

地上1階・通常学習クラス

W・G・主観

《ここが生徒が授業を受ける教室よ。30人1クラスで4クラスが三学年あるわ》

ローズが無線で説明してくる。この無線は人の思考を読み取って発するものだそうだ。口を開かずに他人と意思疎通ができる代物。こちららも声を発さず無線を返す。・・・機械だからできたみたいだ。

《すごい数の女の子だ。しかも全員かわいいな。だが避けるのが大変。よっと》

感想を一つ言い。つま先が生徒の頭をえぐるところをぎりぎり避

ける。

《うちの生徒に手を出さないでね。っていつてもその体じゃ無理よね》

うわ、ひでえ。人前に出れない体のこと言いやがった。

《窃視なら・・・》

《犯罪よ》

《やらないぞ。俺にはフィオナがいる》

《え？まさかその人のことを・・・》

《そついう意味じゃねえ！命の恩人で恋人だ！さっきの映像はたまたまで・・・》

《ふーん？ま、教室はこんなところね。次は医療棟よ》

適当にあしらわれた俺は引き続き彼女の上を付いていく

医療棟とは、この学園では旧軍隊なら一機で一個大隊を相手にできるISを扱っているので事故が起こったとき怪我が重症化しやすい。そのため迅速な対応ができる大学病院並みの設備を備えた医療機関らしい。

《医療棟？保健室もそこか？》

《ええ、山田先生がいるわね。謝っておきたいの？》

《ああ・・・》

自分の運命を懸けた試験だと言っても極至近距離でアサルトアーマーを叩き込んでしまったのだ。

謝罪ぐらいしないといけないとは思っ。

《じゃ行きましようか》

少し移動して医療棟

《ここが保健室よ》

保健室と書かれた板が扉の上に付いてる

《さ、入りましょう》

手を扉にかけようとしたとき勝手に扉が開いた。

「お、織斑先生・・・！」

目の前に立っていたのは一年一組の面々だった。そういえば山田先生は1年1組の副担任だったな。

「ローズ先生。アレはどうしました？」

「え？ああ、真上にいますよ」

あれというのは俺のことだろう。

そしてローズの言葉を聞いた千冬は視線を上げ、目を合わせた・・・気がする。俺、見えてないよな？

「織斑先生、通れませんかよ。あ、ローズ先生もお見舞いですか？」

「え、ええ、ちよつとね・・・」

なぜ焦ったような声で・・・犯人がいるからか？真上に。

「私たちは授業を始めるのでこれで・・・」

ローズが道を明けると千冬を先頭にぞろぞろと出てくる。その中に一人だけ男がいた。

《彼が織斑一夏か。なるほど千冬さんの弟だ》

《そうよ。この学園であなたは三人目ね》

《女の園の男同士、ぜひ仲良くしたいものだな》

《寮で待つてれば？》

《何その襲う的な感じ、てか女子が同室って聞いたぞ。大丈夫なのか？》

《幼馴染らしいわよ》

《よけい大丈夫か？》

会話が終了すると全員出た。そのタイミングでこちらも入る。中には緑髪碧眼の山田先生がいた。

「山田先生。お見舞いに来ましたよ」

「あ、ローズ先生。ありがとうございます」

「原因は何て生徒に言ったんですか？」

「IS操作中の爆発事故と言っておきました。ロボットにやられたと言っても誰も信用しませんし」

「あ、確かに。あと体の調子はどうですか？」

「肋骨が何本か逝ってますけど、明日からがんばりますよ！」

と意気込む山田先生。うう、心が痛い・・・

「あまり無理しないでくださいね。後、彼が謝罪したいそうです」「彼？」

ローズの言葉を合図と認識し地面に着地、じんわりとステルスを除する。

「ヒイイイ!!」

俺を見た瞬間、悲鳴をあげ、毛布を引つ張り、全力でベッドの上を後退。そのまま枕の下にヘッドイン。

「ああああ、コジマは……まずい。」

うわぁ……。相当やられてるな……

「や、山田先生落ち着いて、彼は何もしませんよ」

となだめるローズ先生。しかしその言葉は、動物を怖がる子にける言葉だろ？

一方山^{リンクス}猫を怖がる子、もとい山田先生は枕の隙間から、ちらとこちらを見る。

「あの……複眼閉じてもらっていいですか？」

どつやらの目がトラウマらしい。

カシユンッ

一個だけカメラを残してそのほかは全部シャッターをかけた。これで単眼だ。

「はぁ、これで直視できます。そういうギョロっとしたものためな

んですよ」

という枕から顔をだし体を起こす。

複眼がダメなのか・・・ステイグロとかアリーヤとか見たらどんな反応するのだろうか。

とりあえず正気になったから謝ろう。

「試験の時、理不尽な事してすいませんでした」

「いえ、あの時私も大穴を開けようとしていたので・・・」

「ああ、後、明日から警備員としてここで働くのでこれからよろしく願います」

「え、あ、はい。分かりました・・・」

案の定、会話がとまる。

山田先生は涙目になっているので相当トラウマになっていることが予想される。

ここは切り上げた方がいいか？

「ええと・・・こっちに来たばかりでお見舞い品用意できませんでしたけどお大事に・・・じゃローズ先生行きましようか」

「ええ。山田先生、お大事に」

俺はステルスとPICを起動し、保健室を後にした。

その4日後・・・

あの後、一通り学園をみて巡回路を記憶した。
それから毎日、学園地下から出勤し巡回警備を行ったが特に目立つ
ことも無く、

暇なときは中央塔の上で学園や街を見回して、荒廃する前の世界を
思い浮かべていた。

そして今日の警備が終了して地下に戻った。

「お勤めご苦労さん。何かあった？」

「いいや何も。でもなんか学園が騒がしかった気がするな」

「それは明日、クラス対抗戦があるからね。あなたには関係無いと
思うわ」

「そうだったのか」

クラス対抗戦というのはクラスの代表が戦うものらしい。本当に関
係ないな。

「じゃあ明日も普通に警備すればいいのか？」

「残念。明日は特別任務があるぞ」

「うお！千冬先生！いつの間に?!」

「今来たばかりだ。で、特別任務についてだが、座って話そう・・・
」

作戦を説明する

Reconstruction (後書き)

最後まで読んでいただきありがとうございます。

このぐらいのオリジナルなら問題ないですよね？
ご感想などよろしく願います。

次回はホワイトグリンツの設定。ローズ・クラークのプロフィール
を載せます

S t a t u s (前書き)

特に書くことないな・・・

S t a t u s

ホワイト・グリント

A C 4の主人公だとして書いております。

体高・・・約1 m 9 0 c m

重量・・・約6 t

最高速度・・・P I Cの搭載により白式とほぼ同じ速度で飛行可能（O B時）

装甲・・・I Sの装甲とは比べ物にならない位硬い。ぶつ壊せる兵器はラウラのレールカノンぐらい

プライマルアーマー（P A）・・・言わずと知れた万能防護膜。近接武器以外ならガード可能。満タンの状態を貫通するにはそこそこ強い兵器が必要。まずはP Aを減衰させるんだ！！

コジマ粒子・・・コジマ汚染はP A展開中のみ、たとえばI SがP Aの近くにいるとシールドと干渉し、シールドエネルギーをど削っていく。さらに長時間近くにいると装甲が脆くなる。展開を切ればただの無能粒子にもどとうり。

アサルトアーマー（A A）・・・シールドエネルギーの残量にかまわずバリアーを吹き飛ばす鬼仕様。アリーナの遮断シールドもお構いなし。山田先生が助かったのは絶対防御のおかげ。

武装・・・ACFAのままの武装。今のところ弾薬が補給されず、あらゆる意味で現実は厳しい。

格納庫・・・片方にはPICとステルスが在宅。もう片方は空き家・・・なんとも、情けない・・・

その他設定・・・PICの搭載により無音で半永久に飛び続けることができるようになった。頭の中の記憶などは端末などに送ることができる。iphoneのように

ジェネレーターについて・・・ゲームでは発電が有限のようです。この作品ではとりあえず無限にしますが、作中ではその設定にあまり触れないようにします。

ローズ・クラーク

モデル・・・DEADSPACEよりアイザック・クラーク。MG Sよりローズマリー。

身長・・・165cm

体重・・・53kg

口調・・・ローズさんをお手本に。

顔・・・ローズさんを（ry

戦闘的な部分・・・こちらはアイザックさんがモデル。前話の千冬さんのお話の様な戦いっぷり。

技術的な部分・・・材料さえあれば自分で何でも作っちゃうすごい人。機械の分解、メンテナンスもお手の物。そしてその腕を買われて、ネクストの管理、整備などの担当になった。

S t a t u s (後書き)

ローズさんの設定が思いつかん・・・モデルがいるからだよな。

他の設定についてはフロム脳でどう料理されても結構です。

どうしても気になることは感想などで質問していただければ追記します。

今回はゴーレム先生登場です。

Defense (前書き)

5話目です。今回は早めに投稿。

文字数が一万越えとかなので読むタイミングに気をつけてください。

ああ、冬休みか……この調子だと真冬の時に真夏のネタを書くことになるな……

Defense

作戦を説明する。

雇い主はIS学園

目標はクラス対抗戦中の部外者の排除だ

今回はイレギュラー（男）が参加するリーグマッチだから、万が一を考えての事だろうな

お前さんは学園の近海に浮かべてあるフロートで待機していてくれ

ああ、当然暇になるだろうから依頼主からリアルタイムモニターの使用許可が出ている

必要なら言ってくれ

こんなところか

来るかどうかは分からないが、もし撃破できたならお前に割く金が増えると思うぜ

連絡を待っている

学園からの依頼をG・A・仲介人風に独自解釈。

「で、どうする?」

「もちろん受ける。だけどよ、俺が防衛したら人に見つかるんじゃないのか?」

「ステルスを起動して学園に近づく前に落とせばいい。襲撃してくる奴はお前のことを雑魚だと思って相手してくれるだろう」

「ぎ、雑魚って……」

「この世界じゃ、ISじゃない」^{イコール}雑魚が普通だ。まあ面食らうと思うがな」

要約、ネクストなめんなよってことだ。

「あと全員試合を見ているし、距離も離れているからマズルフラッシュぐらいなら見つかることはないな」

「つまりミサイル、AAを使わなければ見つからない、と?」

「そつだ」

無茶を言ってくれる。リンクス戦争の時はPA張るなどがあったけど武装は無かったぜ。

「よし、試合開始は明日の9:00からだだが警戒は夜明けから始めてくれ」

「了解。ああ、ちょっと……」

「なんだ?」

「頼みがあるんだが……」

IS学園近海
浮島の上

「くく いやくよく晴れたな。絶好の試合日和ってか？」

雲ひとつ無い空を見上げ、鼻歌を歌いながら釣り糸を海面に垂らし
ていた。

《そうだな。……にしても釣りなんか面白いか？》

無線から千冬のおきれた声が聞こえた。

「まあな。前の世界だとコジマで海も川も湖も汚染されてっからで
きなかつたこと、つまり釣りをしたいんだよ」

そう、俺は今、前の世界で失われた地上の文化『釣り』をしている。
ラインアーク近海にも魚は泳いでいるが、釣る気しない、食えない、
コジマ的な意味で。

やるきっかけになったのは、この世界で見たテレビで釣りを見たか
らである。

釣りしてみたいと頼んでみたら釣り道具一式が学園の倉庫から出て
きた。

ちなみにこの状態を見られるとマズイので布を羽織ながら釣りをし
ている。ステルスを起動してやってもいいんだが、そうだと釣竿が
勝手に動くというシュールな光景になってしまうのだ。

《で、釣れたのか？》

「ああ、シーバスが7匹ぐらい釣れたぞ」

釣れた魚はキャッチアンドリリース。この体じゃ食べねーのよ。

《……………》

沈黙？脱帽だよ。とか言わないのか？

《……まあいい、もうすぐ試合開始だ。釣りを切り上げておけ》
「了解」

釣竿をフロートに置き、横にあつたりアルタイムモニターを拾う。
その画面にはリーグ表が映し出されていた。

「ほお、一回戦から弟さんと中国の候補生か。姉として心配か？」

《そこから動くな。そのカツコイイ角をフツ飛ばしてやるよ》

「やめてくれ！スタビが折れたプラモデルの間抜けさはハンパないんだぞ！？」

あ、管制塔から太陽の光が反射してる。スナイパーライフルのスコ
ープレンズだな。あれ。

「待ってくれ！降参だ！ノーカウント。ノーカウントだ！」

《……………よし、許してやろう》

「はあ……………よかった」

《以後、気をつけるように…………おっと、ISがリングインするぞ》
「お？これが一夏の白式と鈴音の甲龍か。白式は名前に同じ白が入
っているから親近感が沸くな」

モニターに目をやると白とマゼンタのISが浮いていた。

白式は見るからに近接特化機体だな。敵なら最悪、味方なら最高で
ところか。ワンオフ・アビリティーはたしか『零落白夜』だったか

？エネルギーを消滅させるんだっけ？まるでエネルギー版ゴジマブレードだ。

甲龍は……何だあのオービット、アレが衝撃砲とかいうやつか。棘が無かったらもろソルディオスだな。そしてこっちも巨大なブレードを見るに近接特化型か。

それはさておき、両者なかなかの剣幕で睨み合っているな。喧嘩でもしたのか？

ISなどを観察しているとOS警告が走った。

警告！正体不明の熱源反応、急速接近！

クソッ、ゆっくり戦闘を見てたかったのに……

「最悪だぜ。ついてねえ、ついてねえよ！」

熱源の方向に目を向けると腕が妙にデカイ人形が飛んでいる。

それを確認後、モニターから手を離し、ステルスを起動しながら布を脱ぎ捨て、ライフル二丁を手に取った。

《どうした？》

「ISらしき物体が飛んで来ている！！12時の方向！！」

『システム、戦闘モード起動します。』

PAを展開、PICとブースターを併用し急上昇。正体不明機と同じ高度まで上げる。

《こちらでも確認した。ISのようだが、奇妙な機体だ》

「どつする？」

《停止信号を出したが無反応だ。構わん。撃墜しろ》

「了解!!」

撃墜命令が下った。

前方200メートルほどにいるISに発砲し、命中。動きを止めた。そいつに向かって、

「お前は、IS学園の主権領域を侵犯している。速やかに退去しろ。さもなければ、実力で排除だ」

撃墜しろと言われたが言ってみたかったので言い放つ。が、申し受け拒否と言わんばかりに馬鹿でかい腕をもたげレーザーを放つてきた。

「おおっ、武器腕か」

そいつをQBで回避後、リロード時間の違うライフルを連射し独特なリズムでISに撃ち込む。

しかしそのISは弾丸を受けつつもこちらにビームを放ちながら学園へ再接近する。

「待て!!」

あっという間に距離を詰め、通り過ぎていくISをOBを起動し追いかけるながら引き続きライフルで攻撃する。

「何なんだあいつは？自律兵器か？」

本来、襲撃が目的なら防衛部隊を相手にする必要はない。だが部隊を壊滅させとけば成功率上がり、襲撃後の離脱時に追撃を受ける可能性も減り、生存率もあがる。軽量機、決死隊じゃ無かったらそう

するだろう。

そしてこいつは見るからに重量二脚……いや重量二腕なのに、俺をほぼ無視して今まで実行していたことを続けるという不思議な行動をとっていた。ISのハイパーセンサーにステルスなどほぼ無意味なので姿は見えているはずなのだが。

俺はこの世界にきてたつた一週間しかすごしていない。つまりこの世界にはネクストの情報が無い。

人間ならデータがなくとも戦えるが、目の前のISは異常事態に自分で判断できないところを見ると自律型の何かなのだろう。

そんなこと今は関係無いが無視されることは防衛する身にとって少クマズイ。

「敵IS、こちらにまったく意識を向けず、尚も学園に接近！生徒を避難させてくれ」

《わかった。！？信号を受け付けないだと？クソツいい加減なもの、何のためのセキュリティソフトだ馬鹿馬鹿しい！！》

「何があつた！？」

《ハッキングでアリーナの扉が強制ロックされた。この際仕方が無い、見つかってもいい、ミサイルの使用を許可する。ただしAAは使うなよ》

《了解》

俺はENを無駄に食うステルスを解除した。

一方、腕でかISはいくらライフルで撃ち抜こうが意に介さず高速移動中。ミサイルは撃つても当たらないだろう。

そしてついにアリーナの真上まで来た。そこで停止、張られている遮断シールドに両腕を向けた。ISはそのシールドをぶち破るほどのエネルギーをチャージしているようだ。

「させるか！」

好機とばかりにミサイルを二発同時に発射する。それぞれ8つに分裂し、計16発のミサイルが一気に襲い掛かる。

爆発にまみれたISは、シールドの上を二転三転するとその上で立ち上がった。そして頭に伸びている触覚をピンとさせ、何かを受信したようだ。

「ターゲット追加、通常兵器、排除開始」

どつちらちつと殺る気になったようだ。だが……

「通常兵器とは、なめられたものだ」

第三アリーナ内部

「り、鈴、あれ……なんだ？」

喧嘩の決着をつけようとしていたことを忘れたかのように話しかける。

「わ、わからないわよ。あんなの……」

わかるわけがない。もしくはわかってたまるか。

試合開始を待っていたら一時中断が言い渡され、その場に待機とされた。

今か今かと待っているときなりアリーナの上で爆発が起こり、白と黒のロボットが撃ち合いを始めた。

ハイパーセンサーから伝わって来る情報は

二機の熱源を確認。機体 B ブラック ・所属不明のISと断定。

機体 W ホワイト ・NODATA

腕がデカイ全身装甲のISは聞いたことは無いが作るうと思えば作れるだろう。

しかしデータに無い兵器がISと互角に戦っている。これはこの世界が引っくり返るほど異常な出来事だろう。

なぜそう思うかと言えば幼馴染の姉、篠ノ之束が10年前に言い放った

「ISを倒せるのはISだけである」

と言う言葉が引っくり返ってしまうからだ。今でこそISを落とすほどの火力を持った通常兵器はいくつかあるがそれは不意打ちを前提としており、撃ち合えば負けるのは通常兵器である。

そのはずなのに真っ向から撃ち合い、攻撃を避け、互角に立ち回っている白い機体の存在が信じられない。

鈴の様子を見る限り同じことを思っているようだ。そしてさらに情報が伝わる。

追加情報。機体W周辺に中濃度コジマ粒子を確認。

「コジマ粒子？何だそれ？」

「あんだ、知らないの？」

あっさりと心を読まれた。すげえな幼馴染・・・

「コジマ粒子ってのは、コジマ博士って人が見つけた、無害で役に立たない物質よ」

「へえ・・・じゃあなんであの白い奴はそれを使ってるんだ？」

「そ、そんなのわからないわよ！！」

「うお、なぜキレた」

ズドオオオオンッ！！

「「！？」」

会話を中断させられる。

「は、入ってきたのか?!」

ついさっきまで戦い合っていたアリーナの上にはすでに姿は無く、今の爆発で巻き起こった煙の中にいるようだ。

そしてハイパーセンサーが緊急告知を行ってくる

ステージ中央、所属不明のISにロックされています。

黒いISがISと同じアリーナのシールドを破って入ってきたんだよな。てことはこれと同じ攻撃を食らったら体をぶち抜かれるかもしれないってことか？

その攻撃がいつ来るかわからず身構えていると・・・

「ぶえつぶえ、危なかったぁ……………」

「「！！！！！！?????」」

煙から現れたのは白い機体……てかシャアベッタアアアアア

！！！！

しかも男の声。

「ここはアリーナの中か。くそ腕ウデデカオでか男め、急に強くなりやがった。今まで目標じゃ無くてなくて戦えなかつたって感じか？」

そんなことを言った後、煙と自分達の間を背を向けて立った。

目の前の白い奴の姿は、人型というところまで分かるが背中からは三角おにぎりを順番に組み合わせたようなものが生えていた。

そして胴体に比べ脚が長く、四股の付け根が異様に細い。その形状は人間が入っているようには見えないが人間味のある言葉を喋っている。

「織斑一夏に鳳鈴音だな？邪魔して悪いが仕事なんでな。いさせてもらっ」

乱入してくるとは、とんでもないやつだ。……………じゃなくて青い複眼がこちらを向き、喋りかけてきた。しかも名前が知られている。

「み、味方なの？」

恐る恐る鈴が確認する。

「ああ、そつだ。学園に雇われてる」

「何なのよ、あんた・・・」

鈴がさらに追撃。俺も知りたいからもつと質問してやれ。

「ん？俺はただの傭兵だ」

「・・・」

あら、止まっちゃまった。その返事を聞いた鈴は何か深刻なことを考えはじめてるし。

にしてもえらくアバウトな返事だな。ISとやり合えるロボットなんてどう見てもただの傭兵じゃねえぞ。

そんなことを考えていると黒いISの熱量が上がりだし、白い傭兵に意識がいつていたが、黒い方の存在を思い出す。

「あぶねえっ！！」

考え事をしている鈴を抱きかかえその場を離脱する。直後、熱線がその場を通過する。

「ビーム兵器かよ・・・しかもセシリアのISより出力が上だ」

こんなのをさつきまで相手にしていた白い傭兵は、馬鹿みたいな出力のブーストをかまして回避していた。

「ちよっ、ちよっと、馬鹿！離しなさいよ！」

「お、おい、暴れるな。そして殴るな！」

「う、うるさいうるさいうるさいっ！」

ズガガガとパンチを打ち込んできた。威力は申し分なし。顎に入ったら脳震盪ものだ。

「だ、大体どこ触って・・・」

「お双方、喰らうとローストチキンになっちまうぞ」

「！！！！」

カアオ！カアオ！カアオ！カアオ！

うるさい鈴はさておき、放たれたビームの連射を何とかかわす。てかローストチキンって某大統領かよ。

そして料理に使える火力をはるかに超えているISがふわりと浮かび上がってきた。

「なんだこれ・・・ふざけてんのか？」

近くで見るといかにも変態的なISだということが分かった。

フル・スキン
・全身装甲。

・二メートルの巨体。

・ゲームの敵キャラに在りがちな巨大な腕。

・むき出しのセンサーレンズ。

・全身に付いているスラスタ、など

いろんな意味で白い傭兵より衝撃だ。

「お前、何者だよ」

「・・・」

当然か・・・目の前の変態ISは答えない。

『織斑君！凰さん！アリーナから脱出してください！そのISはそこの方にまかせればいいです！』

割り込んできたのは骨折しているはずの山田先生だった。こころなしか声に威厳がある。その方というのは、傭兵さんのことか。

「いや、俺たちも一緒に戦います」

あのISはわざわざ中に入ってきて俺をロックしてきた。つまりもとの狙いは俺だ。そしてここを出ると俺を追ってきて外で戦闘すれば、学園の方に被害が出るかもしれない。

「いいな、鈴」

「だ、誰に言ってるのよ。そ、それより離しなさいってば！動けないじゃない！」

「ああ、悪い」

俺が腕を放すと、鈴は自分の体を抱くような格好で離れる。うーん、そこまでイヤだったか。そいつは悪かった。

『織斑君！？だ、ダメですよ！グリントさんもなにか言ってくださいー！』

「志願者のはこばまず・・・戦場の掟だ！！」

お、いいこというじゃないか。

『な、なに言ってるんですか！早く脱出』

山田先生の言葉をさえぎるように黒いISは突っ込んできた。回避に集中し、成功。

「助太刀してくれるとは、助かるな」

グリントさんと呼ばれた傭兵が言葉を発する。

「こちらこそ後押ししてくれてありがとうございます。えーと・・・

」

「ホワイトグリントだ。まあ、好きなように呼んでくれ」

「じゃあグリントさん。どう叩きます？」

「よし、俺が隙を作ろう。それを一人でブツタ斬る。それでいいか？」

単純、それ故に効果的な戦法を提案してきた。

「鈴、どうだ？」

「悪くないわね」

殺る気満々と言わんばかりに青竜刀を振り回す鈴。

「じゃあ、行こうか」

ホワイトグリントはそう言うとブースターを吹かし、突っ込んでいく。

「もしもし！？織斑くん聞いてます！？グリントさん！鳳さん！聞いてますー！？どうして、こう、私の指示を聞いてくれないの?!?!」

山田真耶はかなり焦っている。本来、声を出す必要の無いプライベートル・チャンネルを声に出してしまっていた。ちなみに肋骨を4、5本やっつけてしまっている。

「本人たちがやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう」

「お、お、織斑先生！何をのんきなこと言ってるんですか!?!」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

「……あの、先生。それ色おかしいですけど……」

ぴたりとコーヒー運んでいたスプーンを止め、緑色の粒子を容器に戻す。

「なぜコジマ粒子があるんだ」

「さ、さあ……?でもあの、大きく『小島』って書いてありますけど……」

「あっ！やっぱり弟さんのことが心配なんですね!?!だからそんなミスを」

「……」

マズイ沈黙。マズイ沈黙だった。そしてさらにまずいことが起こる気がして、真耶は話を逸らそうと試みる。

「あ、あのですねっ」

「山田先生。コーヒーをどうぞ」

「へ？あ、あの、それコジマが入ってるやつじゃ・・・」

「どうぞ」

ずずいっと押し付けられるコーヒー（コジマ汚染）真耶は涙目で粒子が対流しているそれを受け取った。

「い、いただきます・・・」

「熱いので一気に飲むといい」

けが人の山田先生に対してこの仕打ち。
なるほど、鬼だ・・・

ズズッ

「うばあー！コジマは・・・にがい・・・」
ガクッ

「先生！わたくしに・・・え？火曜サスペンス？」

真耶はオペレーターデスクにうつ伏せで倒れていた。右手には熱々のコーヒーが・・・

「どうした？セシリア」

案の定、ツツコミを無視する。

「IS使用許可をお願いします。すぐに出撃できますわ！」

「そうしたいところだが、これを見る」

いろんな情報を映している携帯端末を渡す。

「遮断シールドがレベル4に設定・・・？しかも、扉が全てロックされて　　あの白い機体の仕業ですよ！？」

「おしいな、黒いISの方だ。しかしこれでは避難も救援も行えないな。遮断シールドを解除できれば、すぐに部隊を突入させる。」

「はああ・・・待っているしかできないのですね・・・」

「何、どちらにしてもお前の出番はないから安心しろ」

「で、出番が無いとはどういうことですよ！？」

「そのままの意味だ。役者は足りているからな」

「ネタバレは・・・マズイ・・・」

いまだに回復できていない山田先生がつぶやく

「戦いに水をさす筈さんにあつて、わたくしにない！？極めて遺憾ですわ！」

「メタも・・・マズイ・・・」

山田先生は保健室に行きましょう

「くっ……!!」

ああ、残念。これで4度目か……

「一夏っ、馬鹿！ちゃんと狙いなさいよ！」

「狙ってるっつーの！」

一夏の振る刀は、スピード、威力は申し分ない、が、太刀筋が甘い気がする。

何ていうか……手加減しているような感じだ。

まあ、当てられないのは仕方が無いか。高出力QBと同じ推力だからな。

フラジールにブレオンで当てろみたいなものか？

「一夏っ、離脱！」

「お、おうっ！」

またこれか……。一夏が切りつけようとした後、腕をぶん回して追い払い、回転しながらビームを乱射する。その攻撃が完全にパターン化していた。

これがここで言うハードウェアの限界ってやつか？なかなか厄介だが……

「ああもうっ、めんどくさいわねコイツ！」

じれた鈴音が衝撃砲を展開、砲撃。だがこちらも残念。

ISはでかい腕を器用に使って、見えない衝撃を弾くという技をやつてのけた。

高性能というか、馬鹿というかわからんな。まあ、一夏が逃げれた

からいいししよう。

ついでに言うと俺の分裂ミサイルは避けようとしても可哀そうなほど当たってくれる。

そのミサイルでよろめいた所をすかさず一夏が攻撃、だが外す。を繰り返していた。

(さて、とどめはやはりAA・・・いや、ダメだ。危険すぎる。

お?)

腕でか男は攻撃を止め、話している一夏と鈴音に興味があるように意識を向けている。

《おい、どうした?》

無線機能をオープンチャンネルに同期させて二人に話した。

《グリントさん、あれをどう思います?》

《変態だと思っ》

《いや、そうじゃなくて

なんか機械っぽくないですか?》

《あ?あれ無人機だろ?》

《え!?知ってたんですか!?なぜ教えてくれなかったんですか?》

《聞かれなかったからな》

伝説の英雄みたいなこと言ってみる。今主流なのはキュウベえか?ファイオナに『QB知ってる?』って聞かれて「クイックブースト?」て答えて爆笑されたのはいいい思出。

《・・・。。だそうだ。鈴》

《だったらどうすんのよ。無人機なら勝てるっていつの?》

《ああ。人が乗ってなかったら零落白夜をフルで使っても問題ない
だろ?》

なるほど、人が入ってると思ってたから本気じゃなかったのか。
やさしいな日本人は……有澤社長?マジキチだろ?

《そもそも攻撃自体が当たらないじゃない》

《次は当てる》

《言い切ったわね》

一夏は自信満々の様子である。何か策があるようだ。鈴音もその策
に乗る気満々。

織斑千冬のお墨付きだ。期待させてもらおうとしよう。

《俺は引き続き攻撃していればいいな?》

《はい。おねがいます》

答えを聞いたあと、目の前の腕でか男に向き直り、再びライフルを
撃つ。

そして十数発撃ったところでS・O・Mの主砲発射音に負けず劣
らずの爆音に殴られる。

「一夏あつ!」

ハウリングの中、俺は中継室の真下に付いているスピーカーの前に
いることに気が付く。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとす
る!」

ヤメテクレ、アタマガワレソウダ！

《箒、逃げ》

一夏は声を出しているが体が動いていない。

(あ、マズイ、中継室に向かってビーム撃とうとしてっぞコイツ。
コレって守らないといけないんじゃないか?)

とっさに上にQBを吹かし、中継室とISの間に割り込む。その刹那、砲口から光が放たれた。

PAが光を一時的に弾くがその膜を貫通し、胸部装甲を融解させた。

《グリントさん！》

一夏の驚く声が聞こえた。こんなもんじゃやられないから安心しろ。

「だっしやあああつ！！！」

自分が何を考えたが分らないがQBで接近し足の高速起動用ギミックを使って大腕を驚掴みにする。

今話題のブーストチャージ的な感じだ。

《一夏！！鈴音！！コイツを斬れ！！》

大声を飛ばす。下の奴は抜け出そうともがくがライフルを下に向け連射して黙らせる。

《鈴、予定変更だ！！二人で叩き斬るぞ！！》

《まったく、キャンセル料取るわよ！！》

二人はさっき考えていた策を放り投げ、刀を構え両者とも瞬時加速で向かってくる。

「オオオオオツ！」

「セイヤアアア！」

まず白式が雪片式型で上半身と下半身に分断し、ISのシールドを破壊する。

続いて甲龍が青竜刀で胸部と胴体を切り離し、そのまま斬り抜けた。

「ハラシヨー！！！」

きれいな断面でズルリと下に落ち、中に入っていたであろう電子部品をぶちまけた。

その後景を見た俺は意識せずとも歓喜の声を上げていた。

そして自分の下にいる胸部から下を失ったISは紫電を撒き散らし、腕は力なくうなだれている。つかんでいた脚を離すと重力に従い落ちていった。

最後に最高のコンビネーションを見せてくれた二人がこちらに近づいてくる。

「スゴかったぜ。一夏！鈴音！」

「グリントさんのおかげで勝てたな」

「ホント、あんたって何者なの？」

「言っただろう。俺はただの傭兵だ」

キメ台詞のように言ってみた。

「ぶづ。何にしてもこれで終わ

！？」

「ん？どうした？一夏　　！！」

話を中断した一夏の視線を読むとISが再起動していた。そいつは右腕で体を支え、左腕は変形させてこちらをむけている。

次の瞬間、俺が喰らったのよりでかいビームが一夏を包み込む。

一夏はその中を付きぬけ、ISを縦に切り裂き。その場に倒れた。

「今日はニュースではなく特別番組をお送りします。本日、午前9時にIS学園がクラス対抗戦中に所属不明のISに襲撃を受け、同時に正体不明の人型兵器も確認されるという事件が発生しました。IS関連の事件について詳しい、元日本国家代表候補生で軍事アナリストの斑雲亜美氏ムラクモアミに来ていただきました。今日はよろしくお願います」

「よろしくお願います」

「では始めに。今回、IS学園が襲撃された理由として何が上げられるでしょうか？」

「そうですね。まず織斑一夏君が上げられます。ちょうど彼の試合の時にISが乱入。そして彼に撃破されていますからね」

「なぜ織斑一夏君が狙われたのでしょうか？」

「たしかこの試合は一夏君にとって初めての公式戦。しかも男で唯一ISを動かした張本人で、専用機持ちです。いろんな方々が興味を示してもおかしくは無いでしょう」

「いろんな方々とは？」

「ISが絡んでるとなると、国家、それに属するIS研究機関、IS関連企業など様々です。ですが国家がIS学園に手を出すのは考え難いので、恐らく企業が行ったものと考えられます」

「テロリストの可能性は？」

「ISというものは、大金で手に入るものではないのでその可能性は低いと思います」

「なるほど分かりました。次は襲撃してきたISについてお聞きしたいと思います」

「では、この映像をご覧ください。このISが学園を襲撃したそうです」

「えらく形が変ですね」

「はい、通常のISより腕部がかなり長くなっており、この腕に砲口もついていることから後付装備を考えていないようです。ですがその代わりに遮断シールドを貫通させるほどの火力を持っているようです」

「それはアラスカ条約違反ではないのですか？」

「明らかに違反です。IS学園からの情報によると搭乗者、開発国も不明だそうです」

「そうですか。今は事件解決に向けて詳しく調べているようですね。次は先ほどの映像に映った正体不明の人型兵器ついて、あれはISではないのでしょうか？」

「結論から言つてISではありません。先ほど見せた映像でISのビームを受けた時に青いハニカムが現れなかった・・・つまりISのシステム根本であるシールドが張られていないのです」

「代わり緑色の膜が現れたんですけどもあれは何でしょう？それより通常兵器がISと対等に戦えるのでしょうか？」

「どちらにも私にはわかりません。この人型兵器についてIS学園は防衛用に雇った独立傭兵だと言っています」

「独立傭兵？ということは個人でこれを運用しているということですか？」

「どうなのでしょう。どちらにしてもIS学園がこの白い傭兵が詳しい情報を公開

ブツッ

「はあ、面倒な事になったな・・・」

現在、いつもの地下20メートル。先ほどまでテレビを点けていた。その中で流れていた映像はリアルタイムモニター用のカメラで撮られたものだ。なぞのISが無人機という事実は箱口令がしかれているので、その事がわかってしまう部分はカットされていた。つまり一夏&鈴音の胴体輪切りシーンである。

その中なぜ俺が公開されているのかと言うと戦闘中を市民にガッツリ見られてしまい、IS学園はIS以外にはあまり大きな権力を持つていないからだそうだ。

「別にいいじゃない。有名になったから」

ローズが気楽に言ってくれる。俺は彼女に溶けた胸部装甲を隠すように補修してもらっていた。特殊装甲が届けばすぐにでも治してくれるそうだ。ちなみに4つに別けられたISは彼女が回収している。

「そういう問題ではないだろ？あの電話の数はなんだ？教えてくれ〜いじらせてくれ〜って言うてるのが聞かなくともわかるぞ」

あの後、事務室は騒然としていて、鳴らない電話ならぬ鳴りやまない電話。電話の大合唱。そんな状態が一時間続いた。

ついでに言うとネット上も沸騰していて、『白いロボットについてとか』独立傭兵カッケエエエ！！ d(。°。d(イカス！！』とかいうスレが乱立し15スレ以上いつているものもあるほどだ。

「まあ、いずれバレるとは思っていたが、こっちは早くならないと…

」

プルルルル、プルルルル

そうつぶやいた後、整備室の内線電話が鳴った。俺が出れる訳もなくローズが受話器を取る。

「もしもし、ローズ・クラークです」

「もしもし、山田です。ローズ先生、ホワイトグリントさんはそこに居ますか？」

「ああ、山田先生。彼ですか？隣に居ますよ。かわりますね」

どうやら俺に用らしいので、受話器を受け取った。

「もしもし？かわりました」

「グリントさん、あなたに電話が来てますよ」

「え？確か俺への問い合わせは全部キャンセルって言ったはず・・・」

「そ、それが・・・電話をかけてきた方がネクストとか、カラードランク9のホワイトグリントをお願いしますって言ってきたので、連絡を入れたんですが・・・」

「なん・・・だと！？今すぐ繋いでください！」

「！？わ、わかりました！」

ぶつつ

くくく

保留音を聞きながら十数秒待った。

そして、

『もしもし？』

「おお、ストレイドか！！」

前の世界にいたころ、最後に雇った僚機の声が聞こえた。

『！これがホワイトグリントの声なのか？初めて聞いたぜ』

「そうだろうな。あっちでは声帯が潰れてたし、こっちに来てネクストになったら喋れるようになってたぜ」

『・・・やッぱり、アンタもネクストに・・・』

やっぱり？てことはストレイドもネクストになったのか。俺のこの傾向だといつはアリーヤになってるな。

「そういえば、なんでここにいること知ってるんだ？」

『何でって・・・IS学園であんなことすれば国際ニュースものだろ？』

そりゃそうか、IS学園は国際的な重要施設で、一つしかない施設だからな。って・・・ん？

「国際ニュース？お前、日本にいないのか？」

『はて？言ってなかったか？』

「ああ。で、どこにいるんだ？」

相手は場所を知っているのにこちらが知らないのは不公平だと思うため追撃する。

『俺は今、ドイツにいる』

「ドイツ！？ドイツのどこよ？」

『・・・ちよっと待ってくれ』

待ってくれ？言っっちゃいけないような所にいるのか？ナニカサレルような所なのか？

『...言っつていいか?...いいわよ...』

電話を通してストレイドの声以外に20代女性の声も聞こえた。

『待たせたな。俺のいる場所は』

ドイツの最強部隊。

シュヴァルツェ・ハーゼ
黒ウサギ部隊の基地だ』

Defense (後書き)

こんな馬鹿長くてつまらないものを最後まで読んでいただきありがとうございます。

感想、注意点などがありましたら言ってください。

また長いが故に誤字脱字が多いと思われる。それらも言ってください。

次回、ドイツの森のストレイドです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9870x/>

IS < インフィニット・ストラトス > After sinking

2011年12月24日07時52分発行